はじめに

教育学部教育改善委員会委員長　前田晶子

本年度、教育改善委員会では、新型コロナウィルス感染症対応２年目を迎えての授業改善の視点を「ハイブリッド教育」と「SD を土台とした FD 活動」の２点に定めました。双方とも、遠隔授業の導入を経験して見えてきた課題として設定したものです。

「ハイブリッド教育」は対面授業と遠隔授業を組み合わせて授業方針を立てるものであり、昨年度前期に取り組んだ緊急対応としての遠隔授業だけでなく、積極的に学習管理システム manaba や Web 会議システム Zoom、YouTube 等を活用して授業改善を行うことを目指しました。昨年度から実施している授業紹介では、遠隔授業の難しさだけでなく、有効性や可能性にも理解を深めてきました。対面授業との組み合わせを行う上での工夫として参考になる知見が紹介されました（２章)。今後の課題としては、コロナ対応の中での成績評価をめぐる課題の精査があると思います。単に試験がレポートになったなどの実施形態の変化だけでなく、manaba を活用したポートフォリオ評価の割合が増加したといった評価自体の変更・修正などについても検討していきたいと考えます。

学生の授業アンケートでは、昨年度「授業形態」の項を加えましたが、ハイブリッド教育においては多様な授業形態が取られたことから、本年度は、教員が予め授業形態について分類することとしました（１章)。これはアンケートの分析上必要な手続きでしたが、ハイフレックス型（対面と遠隔の同時開催）なども含めると、今後は分類がより煩雑になることも考えられます。ハイブリッド教育における授業アンケートのあり方について再検討が必要だといえます。

２つめの「SD を土台とした FD 活動」については、「教職員が共に考える大学教育の意義～新型コロナウィルス感染症への対応を通して」と題して FD 講演会を実施しました（４章)。これまでの教育学部の教育改善活動は、主として「授業」のみに向けられてきましたが、新型コロナウイルスの危機対応において、全教職員が大学教育のあり方について考え、授業のみならず、新入生へのオリエンテーション、教育実習や体験活動、進路相談、卒論指導などの各方面における教育改善に取り組むことになりました。この経験を活かすことを今回の FD 講演会のテーマとしました。

岡山大学の田中岳教授をお招きしての対談では、現在の国立大学法人の抱える問題が具体的に見えてきました。それは、組織としての大学が内包している職域間・職位間の格差やコミュニケーション不全とどのように向き合うか、それは学問の自由を担う大学の社会的使命を果たす上で不可避であり、学生教育にとって決定的要件であるということです。

しかし、旧国立大学改革の現状はこの原則を忘れつつあることを痛感します。

また、この講演会では、リレートーク「教員と職員の協働のための課題」を実施しましたが、グラフィックレコーディングを導入したことで大変楽しい企画となりました。ファシリテーションの有効性を実感することができ、参加者からも多くの感想が寄せられました。

本年度は、学生FD委員会も充実した活動を行いました（３章)。例年参加していた学生FDサミットは今年も不開催でしたが、現状の課題を精査し何ができるかを考えようという認識が委員の間で共有されました。特に３年生が中心となって活動に取り組みましたが、実は教育実習がやむなく制限されるなど、苦労した学年でもありました。それでも、学生へのアンケートを実施し、100人を超える回答が集まりました。また、シンポジウムでは、コロナ下の学生と教員・大学の連絡体制の課題や、学生からみたアクティブラーニングの利点などについて論議が深まりました。

大学院については、教育学研究科教育実践総合専攻が最終年度となるため、前期にアンケートを実施して課題に対応するよう心がけました（第二部)。また、昨年度、院生からの要望に応えて導入したプリンターは、修士論文作成に活用されました。

年度末には、初めての試みとして、教育改善セミナーを開催しました（５章)。２部構成の企画を立て、前半は附属学校園との共同研究を授業改善に活かすことをテーマとしたラウンドテーブル、後半は令和２年度鹿児島大学ベストティーチャー賞を受賞された中島友樹先生に講演をお願いしました。各学校園がどのような共同研究を行っているのかを交流しましたが、実に多様で豊かな取り組みが行われていることがわかりました。また、実際に学生が共同研究の一環に関わることで、教育実践と有機的につながりをもつ教育学部の授業のかたちを知ることができ、興味深い交流となりました。

また、学生の評価が高かった中島先生のお話では、思わず体育科教育の世界に引き込まれました。理論に基づく授業づくりに参加するなかでの学生自身の変化は、目を見張るものがありました。また、遠隔授業も工夫され、肩肘張らずに参加していた学生の姿が印象的でした。

昨年度は新型コロナウィルス感染症対応が重くのしかかった一年でしたが、本年度は「FDを楽しむ」というコンセプトで教員・職員も学生も参加できたのではないかと思います。

目　次

第一部　鹿児島大学教育学部の教育改善に関する活動報告
１章　授業アンケート回答の分析
１　アンケート実施方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
２　実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
３　結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

２章　令和３年度教育学部授業紹介報告
１　授業紹介の実施計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
２　授業紹介の実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
３　授業紹介における記述　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
４　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

３章　教育学部学生 FD 委員会の活動
１　学生 FD 委員会の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
２　各活動についてと振り返り　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
３　今年度の成果と今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

４章　令和３年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会
１　講演会について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
２　講演概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
３　参加者からの感想（一部抜粋）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

５章　令和３年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会教育改善セミナー
１　趣旨　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
２　概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
３　内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第二部　鹿児島大学大学院教育学研究科の教育改善に関する活動報告
１章　令和３年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査
１　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
２　調査の実施方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
３　結果及び教育改善委員会の分析や対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
４　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

１章　授業アンケート回答の分析

１．アンケート実施方法

令和３年度前後期の授業アンケートを下記の要領で実施した。

- 実施時期：前期　令和 3 年 7 月 12 日（月）～ 8 月 11 日(水)
  後期　令和 4 年 1 月 17 日（月）～ 2 月 4 日(金)
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から 1 つ以上を指定。調査では主に用いた授業形態((a)リアルタイム配信授業、(b)オンデマンド配信授業、(c) 講義資料・課題提示による授業、(d)対面授業から１つ)についても回答を求めた。回答がない場合、履修者数が多い科目 1 つを指定した。
- 実施手段：manaba によるオンライン回答
- 質問項目：Q1～Q11 の 11 項目。Q1,11 以外は 4 件法(1.そう思う、2.だいたいそう思う、3.あまりそう思わない、4.そう思わない)による回答。

Q1. 【学習時間】この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。
Q2. 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。
Q3. 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。
Q4. 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。
Q5. 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。
Q6. 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。
Q7. 【興味関心】この授業は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。
Q8. 【資料】資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。
Q9. 【質問】この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールや manaba 上での質問等を含む）。
Q10. 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。
Q11. 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

前後期の平均スコアを表１に示す。

表1　令和3年度授業アンケートの平均スコア

	前期	後期		前期	後期
Q2	1.59	1.67	Q7	1.56	1.58
Q3	1.71	1.74	Q8	1.44	1.48
Q4	1.41	1.42	Q9	1.63	1.70
Q5	1.70	1.72	Q10	1.51	1.53
Q6	1.48	1.51			

- フィードバック：担当教員によるアンケート結果についての振り返りを manaba で公開した。

２．実施状況

令和３年度の授業アンケートと教員によるフィードバックの実施状況を表 2 に示す。後期の回

答率が前期にくらべて低下している。この傾向は昨年度も同様であった。これは後期のアンケート実施期間が年度末の慌ただしい時期と重なることが主な原因として挙げられるが、アンケートの回答締め切り日が影響した可能性もある。多くの授業で、最終回に授業アンケートを周知あるいは、授業内に時間を設けてアンケートの回答をさせているが、後期は一部の授業の最終回前にアンケートを締め切らざるをえず、回答できなかった学生が一定数いた可能性がある。来年度以降対策を講ずることで、回答率の改善が期待できる。

また、教員によるフィードバックは、昨年度前期は半数近くで実施されたが、その後実施率が低迷している。フィードバックの重要性については論をまたないが、実施率の低迷は授業アンケート回答率低下にもつながりかねないため、来年度以降いっそう周知を徹底する必要がある。

表2 授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R3前期	R3後期	R2前期	R2後期
実施科目数[a]	94	77	99	86
履修登録者数	2663	3335	3490	2955
回答者数	1435	1149	1825	1180
回答率	53.9%	34.5%	52.3%	39.9%
フィードバック数	31	—[b]	47	22
実施率	33%	—[b]	47%	26%

[a] 入学年度によって名称が異なるなど実質的な同一科目を含む

[b] 本稿執筆段階では未実施

３．結果

(1) 平均スコアの傾向と推移

平成 30 年度前期を基準としたときの各アンケート項目の全授業平均スコアの推移を図 1 に示す。なお、結果をみる際は、アンケートの選択肢を先述の通り設定したため、スコアが低いほど評価が高いことに注意されたい。スコアの変動が比較的小さい A 群(主体性、説明、興味関心、資料、満足度)と大きく変化した B 群(シラバス内容、シラバス目標、質問)に分けることができ、以下各群の傾向を概説する。

(i) A 群の傾向

図 1 から A 群のスコアは互いによく似た挙動を示すことが見て取れる。平成 30 年度から改善傾向にあったが、遠隔授業が開始された令和 2 年度前期に悪化した。しかし、今年度前期には再びコロナ禍前の水準にまで回復している。これは多くの授業が対面形式に戻ったことや学生、教員が遠隔授業に慣れてきたためと考えられる。後期後半は新型コロナ感染の再拡大により多くの授業が急遽遠隔に切り替わるといったアクシデントがあったためスコアは全般的に悪化したものの、「主体性」以外の項目については悪化の度合いは小さい。

(ii) B 群の傾向

B 群のスコアは平成 30 年度からいずれも大きく改善している。シラバス内容、シラバス目標は昨年度にかけて大幅に改善し、その後もスコアを維持している様子がわかる。近年のシラバスの実質化についての取り組みが一定の成果として現れたといえる。また、質問のしやすさはここ数

年で最も大きな改善がみられた項目であり、多くの授業で質問をしやすい雰囲気が醸成されつつあると考えられる。また、本項目は今年度後期については幾分悪化したものの、コロナ禍にあっても良好なスコアを維持していたことは特筆すべきである。授業紹介では、「対面授業ではほとんど質問がでなかったが、遠隔授業では Zoom の chat 機能等で質問がでるようになった」といった例も報告されており、質問のしやすさにおいては必ずしも遠隔が不利ではないのかもしれない。

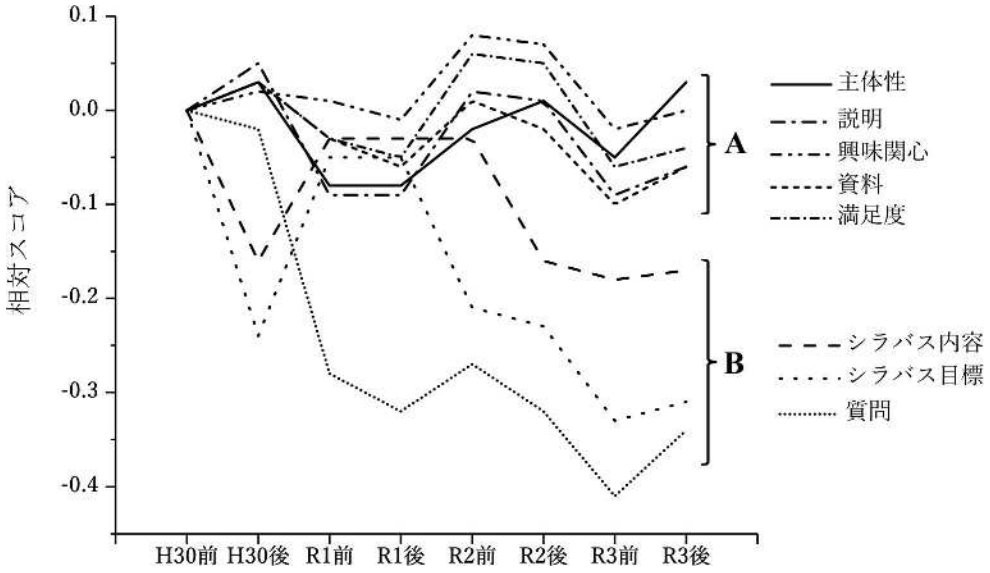


図 1　平成 30 年度前期を基準とした各アンケート項目の平均スコアの推移

(2) 授業形態ごとの比較

授業形態ごとにスコアの集計を行った。ここでいう「授業形態」は、授業で主に用いた形態 1 つを指し、ブレンド授業や、後期後半に遠隔に切り替わった授業もあるため、評価には注意が必要である。図 2 に前後期の遠隔リアルタイムと対面授業のスコアの比較を示した。なお、遠隔オンデマンド、資料による授業は授業数が非常に少なく、平均値から傾向を読み取ることが難しいため除外した。すべての項目で対面の方が良いスコアであることがわかる。とりわけ主体性、理解度、興味関心といった項目はスコアの差が大きく、遠隔授業では十分な配慮が必要である。

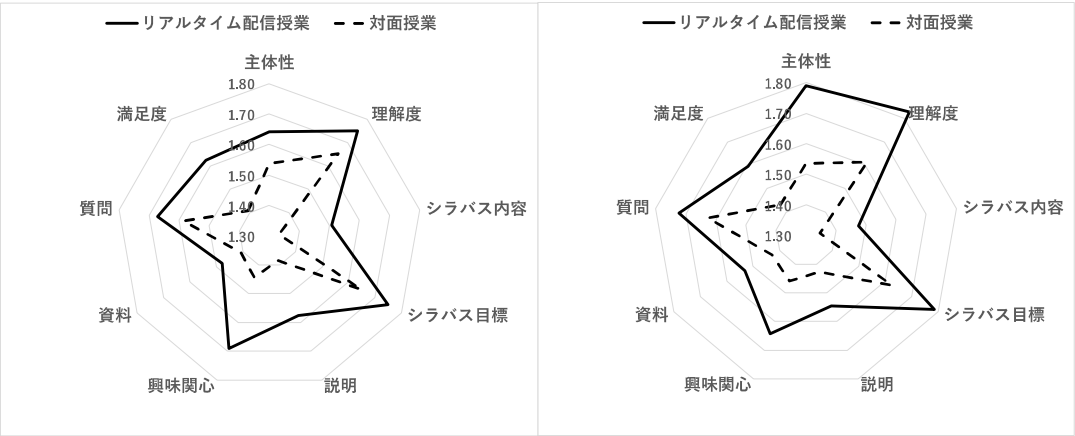


図 2 授業形態ごとの平均スコアの比較。左は前期、右は後期のもの。

次に授業形態ごとの授業外学習時間の比較を図 3 に示す。リアルタイム配信授業では後期でやや学習時間が減ったのに対し、対面授業ではやや増加しているなどの違いが見られたが、授業形態による差はそれほど大きくない。また、授業外学習時間が「1 時間以下」と著しく不足している層が 2〜4 割に上り、2 時間に満たない層まで含めると 6〜8 割にも達することが浮き彫りとなった。コロナ収束後はサークル活動やアルバイトといった様々な活動が本格的に再開し、授業外の学習時間はさらに減少することも懸念される。引き続き授業外学習時間の確保を呼びかけるとともに、授業内においても適宜復習を盛り込むなど、こうした学生へのフォローが必要であろう。

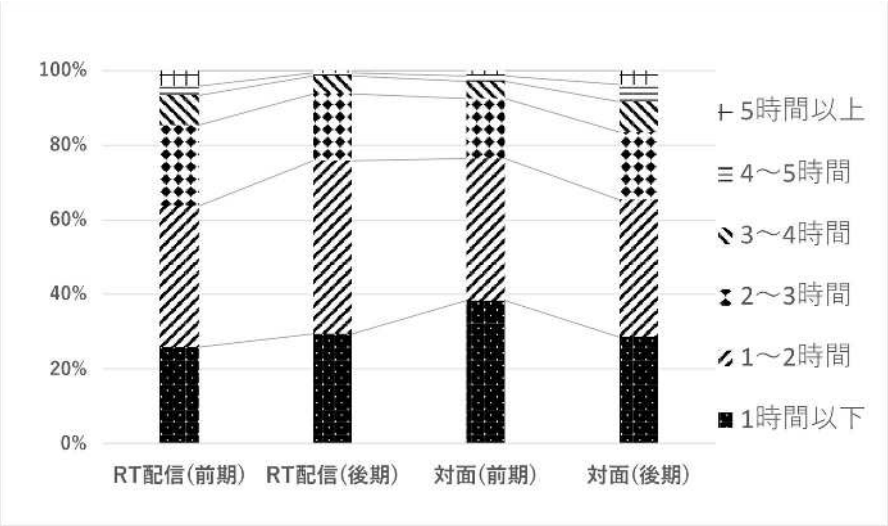


図 3 授業外学習時間の比較。RT はリアルタイムを表す。

２章　令和３年度教育学部授業紹介報告

１．授業紹介の実施計画

(1) 授業紹介の目的と枠組み

「鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針」では、ＦＤを「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す」と定義付けられている。また「教員の責務」として、担当する授業方法や運営方法等の改善を自発的に行うことが求められている。

本学部の教育改善委員会では、これらの目的を実現するために、例年「教員相互による授業参観」を実施してきたが、新型コロナウイルス感染拡大により、昨年度に引き続き本年度も「授業紹介」を実施した。以下、その実施状況等について紹介する。

(2) 授業紹介の実施

教授会での周知を図った後，前期７月 30 日（金）～8 月 25 日（水），後期１月 19 日（水）～２月４日（金）の期間に実施した。教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の授業科目及び教育学研究科・教職大学院の授業科目から、各教員が自身の担当科目１科目を選択し，「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」について，実施方法・工夫・課題等の記入及び提出を求めた。

２．授業紹介の実施状況

２回の授業紹介は，教育学部教員から報告いただいた。報告件数は，延べで前期 14 件，後期７件の合計 21 件である。今年度は新型コロナ感染第４波・第５波・第６波と感染者の増加が繰り返された。先生方はその都度授業方法を臨機応変に変更せざるを得ず，その対応等で忙殺されている中でのご報告であった。深謝したい。

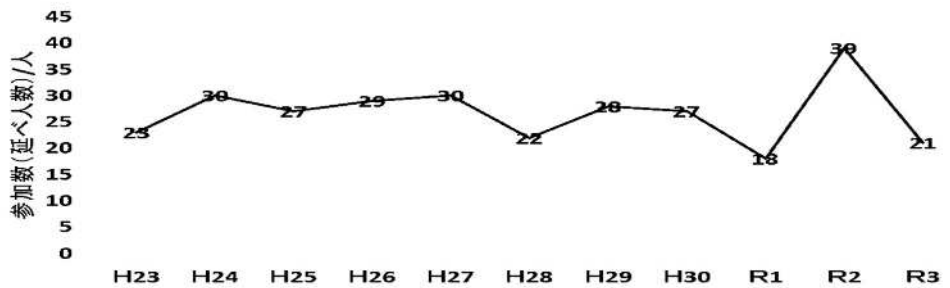


図1　授業参観（令和元年まで）及び授業紹介参加者数の推移

３．授業紹介における記述

昨年度は，遠隔ライブ中心の授業形態であったが，今年度は「遠隔+対面」「対面のみ」という授業形態も増加した。以下，各授業の工夫した点などについて，前期回答の一部を抜粋し紹介する。なお，紙面の関係上，紹介できなかったその他の回答及び後期分の回答については，教授会資料等を参照されたい。

(1) 授業準備

① manaba の活用，資料の事前提供

・授業前に、manaba のコースニュースで次回の予定と前時の振り返りを示すことで、受講への動機づけを行うようにした。

・講義と連動した全授業のノートを，講義の初日までに manaba のコンテンツとして受講生へ提供している。

・指導略案作成のための，教科書会社提供の年間指導計画作成資料や，附属学校の公開研究会で提供された指導案などもコンテンツとして提供している。

・代用附属学校の研究公開で配布された指導案や各都道府県教育委員会がインターネット上で公開している指導案を事前に確認し、学生にとってより参考になるものを優先して紹介した。

② 授業方法（遠隔，対面）を考慮した授業準備

・授業では，中学校及び高等学校の数学科教科書のコピーを利用する必要があった。新型コロナの影響によって，突然，遠隔授業になる可能性もあったため，前期授業の最初のあたりで，前期で利用する予定の教科書のコピーをすべて配布した。結果としては，前期のすべての授業を対面形式で実施することができたが，前期授業の見通しを受講生にもってもらう上でも，よかったように感じている。

・対面授業に先立って、授業動画を視聴させ、１人１つ以上の質問を提出させた。また、コロナの影響で対面授業に参加しにくい者が居ることを考慮し、動画を視聴し質問提出までを求め、対面授業の参加は任意とした。

(2) 授業運営

① 授業方法の選択

・対面授業を教室で受講するか、zoom による遠隔授業を受講するかは受講生に選択させた。実際には教室で行う授業を zoom で中継する形を採用した。

・教室に対して受講人数が多かったことから、３分割したグループに分け、それぞれ別時間に授業を行った。例年のように大人数であれば、他の受講生から刺激を受けたり話し合い活動をとおして自身の作品を見直すことができるのだが、小人数になったことで、自分のなかで深く考えて進めているように感じた。小人数にしたことで教員が一人ひとりの指導に時間をかけることができたためか、例年より作品の質が上がっていることに驚いた。

・授業形態としては、第１回：遠隔ライブ（Zoom）、第２回：課題提示型、第３回～第９回：遠隔ライブ（Zoom）、第１０回～第１５回：遠隔と対面（ハイブリット形式）で行った。遠隔授業は授業内容の提示（いろいろな資料を簡単に共有できる）ではとても有効であったが、話し合い活動などアクティブラーニングの取り入れに課題がみられた。

② 学生の反応を活かす授業

・zoom のコメント機能を多用している。また、スマホやタブレットではテキストでコメントが書けないので、それらの学生には「チャットで書いてね」と伝え、私がそれを適宜読み上げて共有している。

・授業時は対面式の利点を活用すべく、学生との対話の中で講義が進行するよう心がけた。

(3) 成績評価

① manaba の活用

・毎回授業終了後に、マナバにて自動採点の小テストを実施。特にレポートも求める。授業中の態度２０％、小テスト、レポート４０％、期末試験４０％である。

・レポートは、Word を PDF 化しないで manaba に提出させています。Word 形式のレポートは、ダウンロードせずに「表示」ボタンを押して表示することができるので、非常に採点が楽である。

・各種の提出課題については manaba 上で公開し、各自の取組を客観的に考察できるようにした。これらを総合的に評価するようにした。

② 評価方法の工夫

・教室を美術館にみたて、作品タイトルや解説を書いたカードとともに作品展示をし、受講生全員が自由に鑑賞し合う時間を設けた。成績については、このカードと作品によって評価した。本来は一人ずつ前に出て発表する形式をとっていたが、この鑑賞方法に変更したことで、制作者は思いのたけをすべて吐き出し、また鑑賞者は作品を隅々までじっくりとみて積極的に質問するようになった。これによって、本人のなかで達成感が強くなったのではないかと感じた。

(4) 授業時間外学習の支援

① 支援の工夫

・短歌実作へむけて、課した歌題と同様のテーマで作られた古典和歌を例示して参考にさせた。また提出された短歌に対して、教員側が添削および代案を提示することによって受講生各自の課題提出への意識を喚起した。

・対面授業ではすべての質問を扱えないことや対面授業に出席できない学生が居ることを考慮し、提出された質問すべてについて対面授業後に manaba で回答を公開した。ただ、これについても対面授業にあまり出席していない学生は閲覧しておらず、工夫が必要であった。

② 今後の課題

・対面授業ではすべての質問を扱えないことや対面授業に出席できない学生が居ることを考慮し、提出された質問すべてについて対面授業後に manaba で回答を公開した。ただ、これについても対面授業にあまり出席していない学生は閲覧しておらず、工夫が必要であった。

・以前であれば、履修者は模擬授業の準備・練習をいわゆる「空き教室」でしていたようだが、（コロナ禍においてやむを得ないことではあるが）教室の開錠施錠が必要になり、その対応に難儀した。

４．まとめ

昨年度に引き続き「授業紹介」の形式で，教員相互の情報交換を実施することで，冒頭に示したＦＤの目的を達成することができた。寄せられた情報は，いずれも有益なものばかりであった。そして，何よりも各教員がコロナの感染状況に応じて，様々な工夫を凝らしているという事実を共有できたことが大きい。今後も，状況に応じた情報交換を継続したい。

３章　教育学部学生 FD 委員会の活動

１．学生 FD 委員会の概要

学生 FD 委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的として FD 活動を担う学生主体の組織で、各専修２名の委員から構成されている。FD 委員会の具体的な活動として全国学生 FD サミットへの参加や学部シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のＦＤ委員会は、新型コロナウィルスの影響もあり、全国学生ＦＤサミットの中止や大学祭規模縮小によるソフトボール大会の中止などと活動内容が制限されている中での活動となった。

２．各活動についてと振り返り

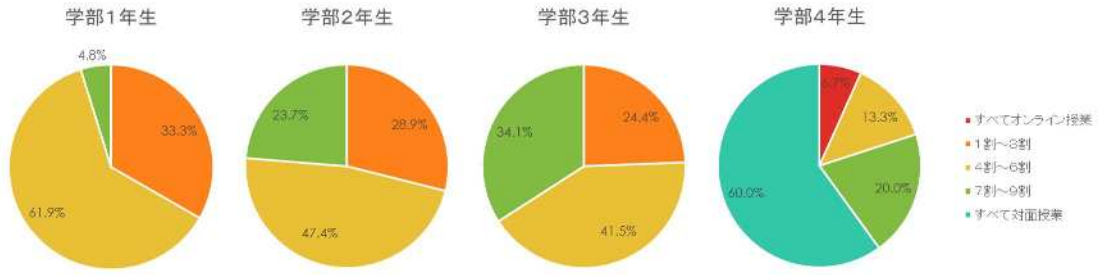
（1）ＦＤシンポジウム

新型コロナウィルスの影響による新しい授業形態へ切り替わって２年目の年を迎えた今年度は、遠隔授業におけるアクティブラーニングに焦点をあて、「近年における、授業・連絡等の在り方について」というテーマを設定してシンポジウムを開催した。学生ＦＤ委員によって教育学部全学生を対象にアンケートを実施し､オンライン化された授業や連絡体制について､学生は日々どのような状況におかれているのか調査を行っている。シンポジウムでは、これらの調査結果をもとに、教員と学生がよりよい環境づくりを目指した意見交換を行った。以下は、アンケートの抜粋である。

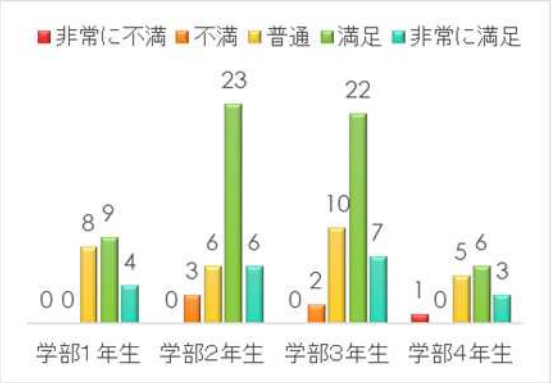
【 学生 FD 委員会アンケートについての報告 】

回答者：115 名　（1 年生 21 名、2 年生 38 名、3 年生 41 名、4 年生 15 名）

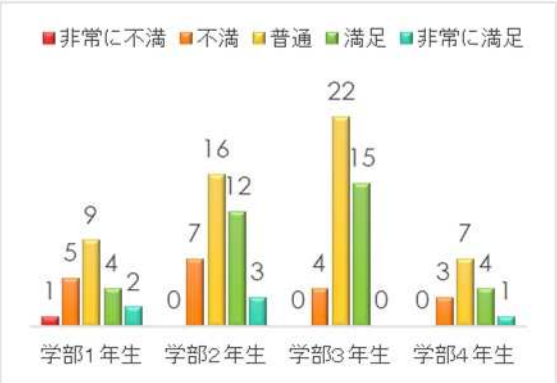
1. 現在の対面／オンライン授業の割合



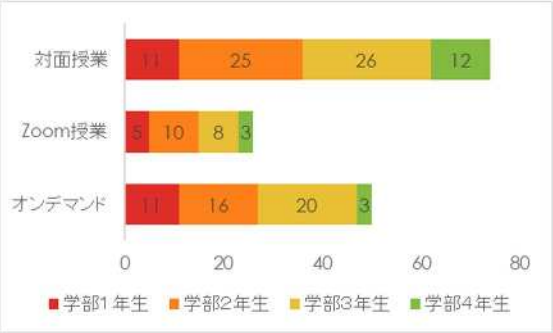
2-1. 現在の対面授業の満足度（5 段階評価）



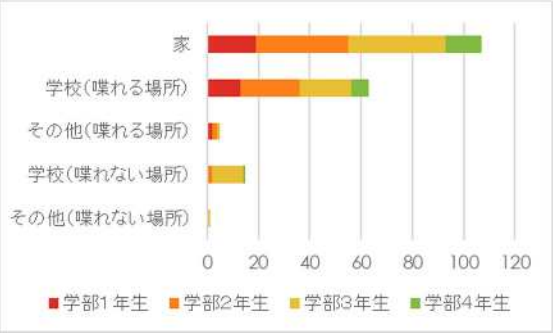
2-2. 現在のオンライン授業の満足度（5 段階評価）



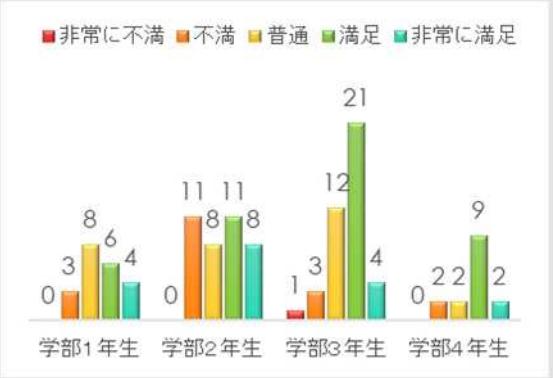
3-1. 好きな授業形態はどれか（複数選択可）



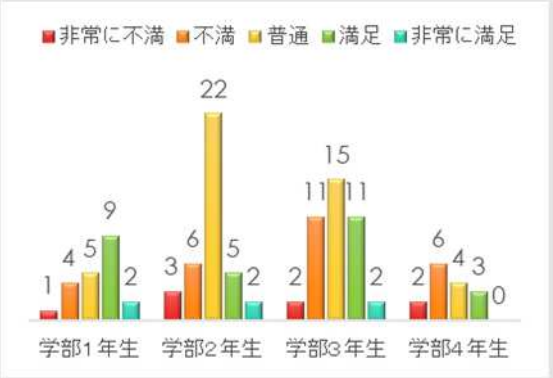
4. 普段 Zoom 授業をどこで受講しているか（複数選択可）



5-1. 現在の対面での授業内容は
アクティブラーニングといえるか（5 段階評価）



5-2. 現在のオンラインでの授業内容は
アクティブラーニングといえるか（5 段階評価）



3-2. 選択した理由を教えてください（任意回答）
計 71 件の回答　　○良い点　△悪い点　（学年）

【対面授業】
○リアルタイムで行われる授業形態の方が自分にあっているから（1, 3）
○対面授業は、オンラインより集中できるから（1, 2, 3, 4）
○授業の内容だけでなく、学ぶ場の雰囲気も感じることができるから（1）
○人の顔が見えるから／孤立感がないから／対面でないと楽しくない（1, 2, 3）
○学びに対して前向きになれる／気持ちが入りやすい（2, 3）
○授業内容が理解しやすいし、他の人とも直接交流できるから／意見交換がしやすい（1, 2, 3, 4）
○先生や友人に直接質問しやすい（1, 2, 3, 4）
○より深い学びを得られると感じたから／専門科目は対面の方が学びが深い（2, 3）
○インターネット環境を心配する必要がない（1, 2）
○実技ができるから（4）
○数学のような理論的な授業は細かい計算過程や教授のぼそっと放つ一言などが非常に有用なことが多いために、これらは対面がよい（2）

【Zoom 授業】
○一人で学習する分集中力が上がる（2）
△対面授業に対して講義形式になることが殆どで、アクティブな学びができていないような気がする（3）
△ディスカッション等を行う形式であれば対面が適切である
△知識を淡々と述べるようなものについてはオンデマンドで十分ではないか（2）

【オンデマンド型授業】
○学習の時間を長くとることができ、本来授業する 90 分に加え思う存分勉強することができる（3）
○気になったところ、聞き取れなかったところを何回でも見られる（1, 2, 3）
○レポートを書く際にじっくり見返したり止めたり出来るから（1, 2, 3）
○急な用事にも対応することができる／好きな時間に受けられる（就活との関連）（1, 2, 3, 4）
○パソコンでノートを取ったり、資料を見たり、調べ物をしたりしやすく、頭に入りやすい（2）
○先生側の授業の準備が整っており、効率よく勉強できる（2）
△特にオンデマンドは、教員からの直接の授業ではなく、自分が学びを得たという実感が薄くなるため（3）

【オンライン授業（Zoom、オンデマンド）両方に関わるもの】
○体調が悪くても欠席せずに自分の体調に合わせて受講することができる（2, 3）
○外出するのが怖いという気分になったときでも欠席せずに授業を受けることができる（4）
○自宅でも受講できるため、忘れ物が起こり得ないことはとてもありがたい（3）
○遠隔でも学べることは多い（3）
△オンライン授業は、学びの幅が狭いから（4）
△オンラインだと、自分の勉強のやる気が中々起きない（2, 3）
△授業と課題とのバランスが取れていないものが時々あり、制約が多く苦しい（3）

【分類できないもの】
○対面授業・Zoom 授業は移動時間と交通費を節約できる（1, 2, 3）
△遠隔ー対面と続くと、結局学校で受けないと移動が間に合わない。最初から対面がいいと思う（3）
△学費を払っているから（対面授業選択）（3）
・対面が一番楽しいと感じるが、通学に時間がとてもかかるので、オンデマンドやズームでの授業だと負担が少なくて助かる（2）

6. あなたが考えるアクティブラーニングについて教えてください（任意回答）　計 40 件の回答

＜１年生＞
・グループワーク／グループワークやディベート／生徒同士での話し合い
・グループ活動などで、自分の意見を積極的に他者と交換すること
・自分の考えを周りの人と共有することで深め、さらに意見を出し合うことで自分になかったものを得られること
・生徒自身が考察し、授業内容の理解に近づく活動
・発言回数が多い

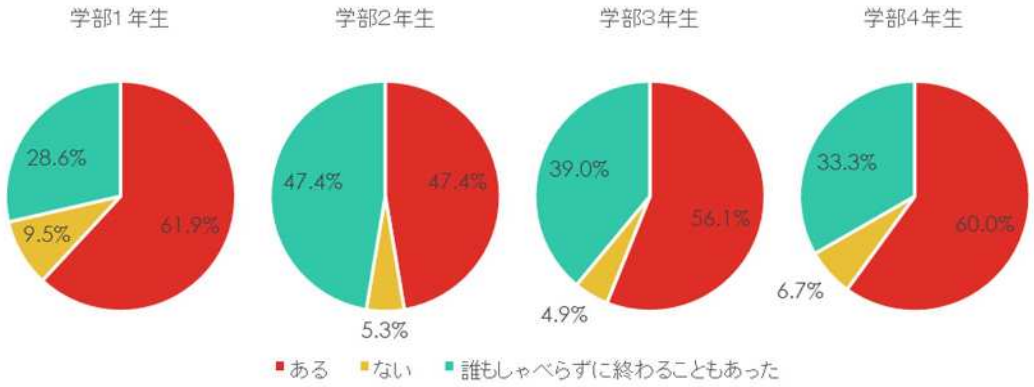
＜２年生＞
・Zoom のグループ活動であっても活発に話し合いを行うこと
・教師と生徒が、課題目標に対しての活動を通して実感を伴う学びを得ること
・問題や他の人と対話することを通して考えが深められる授業
・主体的に、自らの考えを話し合い、他人の意見を聞いて深めること
・他人と話して互いの意見を交換して自分も相手も考えを深めること
・教授が一方的に話すだけではない授業
・全員で１つの授業を作り上げる授業
・学生同士の交流が活発であること
・自分で考え、アウトプットする機会があること
・生徒同士で話し合い、グループで発表するなど
・本人が主体的に学び、深めようとすること

＜３年生＞
・教師と生徒の相互的な活動がある。授業中に話したり、考えたりして、疑問を解決する時間がある
・意見交換／学生同士の話が多い／他の人と良く話す／話し合いが活発である状態
・活動的な学びという直訳から、学習者が主体となって学習に取り組むものである
・グループ等の皆が意見を述べ、それについてしっかり反応が得られる授業
・学生それぞれの意見から、テーマについて考えを深めることができる学習
・先生からの一方的な指導ではなく、受講生が主体的に学ぶこと／先生や受講生との会話がある授業
・思考を深く働かせる授業
・授業に積極的に参加する
・授業外でも科目の内容に何かしら触れる活動

＜４年生＞
・自分の意見を出したり他者の意見を共有したりする学習
・他の受講生と積極的に関わること
・生徒同士でも教師と生徒の間でのコミュニケーションでもいいので、とにかく自分で言語化して相手がそれを理解できるかまた相手が言ったことを自分がちゃんと理解できているかということを確認できるような授業

◇アクティブラーニングとは異なるが、以下のコメントもあった
・対面でも淡々とただ講義資料を書き写す教授もいれば、細かく丁寧に解説してくれる教授もおり、熱量の差を非常に感じる (2)

7. Zoom のブレイクアウトで司会決めや喋り出しに困ったことはあるか



8. Zoom の授業で困ったことや要望などはありますか（任意回答）　計 33 件の回答

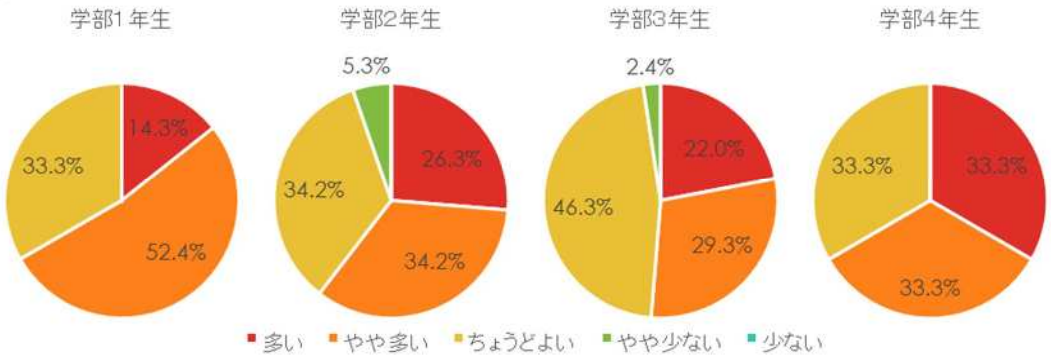
【ブレイクアウトルーム／話し合い活動】
・Zoom で知らない人との話し合いが主になる授業は辞めてほしい。会ったこともない人と違う環境下で話し合うのは、かなり細かく題材や話し合いの進め方、工夫がない限り、難しいしあまり学びはないと感じる。生徒に投げっぱなしの授業に感じる (3)
・Zoom のブレイクアウトルームの時間は、誰一人喋らなかったり、挨拶だけして議論に参加しなかったり、意見を述べても誰もコメントしてくれなかったりする／ブレイクアウトがうまくいかない (2, 3)
・グループワークで喋りづらい話を切り出せない／アイスブレイクの時間をもうけてほしい (1, 2)
・挨拶をしても返事が返ってこない (2)
・司会は先生が決めて下さると助かる (2)
・人によりけり／誰も話さないこと／話し出すタイミングが分からないこと (1, 3)
・発言しづらい／ブレイクアウトではじめに発言した人に責任がのしかかりやすい (2, 3)
・勇気を出して司会役を買って出ても話し合いに参加してくれない人、話が途切れるとすぐにカメラとマイクをオフにする人がいるととてもやるせない気持ちになる (1)
・発表者１人だけに顔出しを求めるのは恥ずかしい (3)

【授業全般について】
・ズームの授業だからといって先生の方が一方的に話し続ける授業では全く理解が進まない。対面授業でないなら、なおさら生徒の間での話し合いもできないので全く理解ができない状態が続く。そのようなことになると学習の遅れを非常にとってしまうのでやめてほしい。ブレイクアウトルームを活用したり講義中でも気軽に話せるような雰囲気作りをした上で授業をしてほしい（2）
・毎回の授業で課題が出るのは負担が大きい。授業者全体で、課題の量を共有し合ったうえで分散させて課してほしい（3）
・スライド中心の授業ならオンデマンドで十分。わざわざリアルタイムで行う必要性を感じない（2）
・英語だと特に指示が分からない（1）
【インターネット環境や配布資料等について】
・こちらの回線落ちで、再度入りなおす際、先生の勘違いで遅刻扱いになったり、理解不足で欠席扱いにされたり、出席確認の機会を失ったりした（3）
・インターネット環境やパソコンの不調で上手く受講できないことがある（1,2）
・大量の資料を自分でコピーしなければならない（2）　・スライド資料が配布されない（2）
【その他】
・対面とオンラインが前後する時の移動／場所の確保（2）
・授業前の連絡等が上手くいかない時がある／授業内外の周囲との連絡や協力がしづらい（2）
・話せない環境にいるとき（3）
・声を出せない状況で授業に参加する人がいること（3）

12. 課題について困ったことや要望などはありますか（任意回答）

＜１年生＞
・論文を書く課題や発表を目標にした課題などの比較的重たい内容の課題がそれぞれの授業で出され、重なること
・多すぎて、困っている（1,2,3　自分の勉強時間が取りにくい、多すぎる講義がある）
＜２年生＞
・上の先輩との繋がり等がないので、わからなくなった時に誰にも相談できず困ることがある
・課題の提出時間を 0:00 と設定されると一日分時間を勘違いしてしまう
＜３年生＞
・授業当日に課題を締め切られると、バイトや用事がある際に、どうしても提出できないので、せめて授業後の 24 時間後以降にして欲しい（1,3　次の日まで提出など）
・文献を読んでレポートを作成しなさいという課題では何を書けば良いか分からなかった（2　課題の説明が少ない）
・レポート等を共有する際は、せめて名前が見えない形で共有して欲しい
・授業全体で、課題の量を共有し合った上で分散させて課してほしい
・フィードバックが欲しい
＜４年生＞
・生徒同士での話し合いができない期間が続くと、分からない課題があると自分で調べてやるしかないが、それでは課題の解決が非常に難しい

13. 現在の大学からのメールの量について



14. メールに関して要望がありますか（任意回答）

＜１年生＞
・就職関係のメールや他の学年対象など関係があまりないものが届くため、メールが多いように感じる（1,2,3）
＜２年生＞
・マナバの個別指導でのやりとりをやめてほしい。重要な書類に不備があった際、メールとマナバが混雑してしまい見逃してしまうことが多々あった
・自分に関係のないあるいは興味のないものは外せるようにしてほしい（システム的に難しいとは思うが）。希望する配信、重要度が分かるように、manaba の通知が埋まってしまうためまとめてほしい（1,2,3,4）

＜３年生＞
・就職関係のメールは、その分野に興味がある人が随時 maanaba を確認すれいばいいと思うので、導入に必要かもしれないが、正直あまり必要ないと思う。１年間で大学からのメールが 3,000 件程溜まって、本当に必要なメールを見逃してしまったり、埋もれてしまったりしてしまう。
＜４年生＞
・メールの重要度が明確に分かるような工夫をしてほしい
・以前 manaba 上で該当学生だけでなく全体に向けて何度も情報を発信していた教員がおり、とても迷惑でした。実習やその補講の伝達事項、各学科のお知らせなどは今一度対象学生を確認してから発信してもらいたいです

15. その他、教育学部に望むこと、期待することなどがありますか（任意回答）

＜１年生＞
・４年間で各種類＋第二免許の教員免許を取ることのできる時間割プランや、先輩方の４年間の時間割例などを紹介して欲しい
＜２年生＞
・対面授業を増やしてほしい。実習に行った附属中学校で生徒たちが対面で話し合い活動も行っているのを見て、なぜ大学ではこれができないのか疑問に思った
・14. メールに関しての要望でも述べたように、重要なことや書類等は担当教員に任せるだけでなく個人に電話等で連絡するなどを行って頂きたい
・実習系の連絡はなるべく早くしてほしい。２週間の県外移動の自粛やアルバイトの制限がある中で、２週間後の予定は決定していたりする
・親睦を深められる機会が欲しい
＜３年生＞
・授業中の感染対策が甘いと感じる。教壇のアクリル板を外したり鼻出しマスクであったり意識が低いと感じるため、感染対策強化を望む。そうでないと対面授業を受ける気になれないため。
・教育現場の良い部分だけ見せようとしすぎている。悪い部分もあることはしっかりと紹介しないと、先生を目指す人たちが知らない情報も現場で気づいては遅い。
・授業料免除。介護体験と授業がかぶったときに公欠を使えるか代替課題をもらえるようにしてほしい。授業料を払っているのに不利益だと思う。
・授業を監査の人などに見に来て欲しい。理不尽な程に単位認定させて貰えない授業もあると耳にした。
・知識を知ることも大事だが、指導案の書き方や模擬授業を行うなど実践的な学習を増やしてほしい
・集中講義の日程をシラバスにも書いて欲しい（もう少し早めに連絡できないのか）
・建物をもう少し綺麗にして欲しい。音楽美術棟とか。
＜４年生＞
・教育学部以外の学部で教員免許を取得するのと教育学部で学ぶこと何かの差があるかと言われれば正直に言ってそこまで思いつかない。教員免許を複数取るのは魅力的ではあるものの、他学部の学生はその代わりに専門性を非常に高めている。であれば教育学部は教育に関する授業の内容をもっと充実させるべきではないか。教員免許取得に必要な科目だけでなく、より実践に即した内容や教師の本質を問うような内容、また最新の教育時事を取り上げて議論するような内容を行っても良いのではないか。
・教室の清掃にもう少し力を入れてほしい

（２）ピアサポート

昨年度に作成した新入生への履修支援冊子『履修登録のすすめ』を来年度の教育課程に合わせて修正し、より分かりやすい内容へと改善した。また、４月に新入生だけでなく２年生以上も相談できる窓口をオンライン上に開設し、各学科のＦＤ委員が実習に対する相談や履修に関する質問を受け付けられるような体制を整えた。

３．今年度の成果と今後の課題

教育学部全体がコロナ禍における授業方法や連絡体制に慣れてきたなかで、新たな課題が多く見えてきた。シンポジウムでは学生側に立つことで初めて知る問題点も多くあり、まだオンライン化が続くと予想されるなかで、より良い学習環境づくりのために教職員と学生双方が工夫し努力しなければならないことがあるのではないかと感じた。また、学生ＦＤ委員会の在り方については、積極的に参加する学生の偏りが生じてしまい、学生が主体的に取り組むための活動方法を今後検討する必要がある。

４章　令和３年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会

1.　講演会について

開催目的　従来，教育学部の教育改善活動は，主として「授業改善」に向けられてきた。しかし，新型コロナウィルス蔓延の危機対応において，全教職員が大学教育の在り方について考え，授業のみならず，新入生へのオリエンテーション，教育実習や体験活動，進路相談，卒論指導などの各方面における教育改善に取り組むことになった。これらを通して「SD を土台として初めて FD が実現する」ということを学ぶ経験となったといえる。しかし，これまで教職員全体が行う SD 活動は行われていない。そこで教員と職員が連携して取り組む SD 活動の視点について考えることを目的とし開催する。

テーマ　「教職員が共に考える大学教育の意義～新型コロナウィルス感染症への対応を通して」

講演者　岡山大学　全学教育・学生支援機構　田中岳教授

グラフィックレコーディング　関美穂子さん

開催日時　2021 年 9 月 29 日 13：30‐15：30

会場　Zoom によるリモート開催（発信：教育実践総合センター1 階多目的室ほか）

出席者　43 名（うち教育学部教員 19 名，教育学部事務職員 9 名含む）

会の流れ　あいさつ（教育学部長　有倉己幸先生）

講演と対談「学生中心の大学教育を実現するチームづくり」

田中岳教授＋前田晶子先生（教育改善委員会委員長）＋江頭大典総務係長

リレートーク「教員と職員の協働のための課題」

① 授業・教務　大渕貴之先生＋冨山陽子教務係長

② 学生生活・教育実習　片岡美華先生＋本坊綾学生係長

③ 協働　清水香先生＋前田晶子先生

田中先生からのコメント

グラフィックレコード紹介

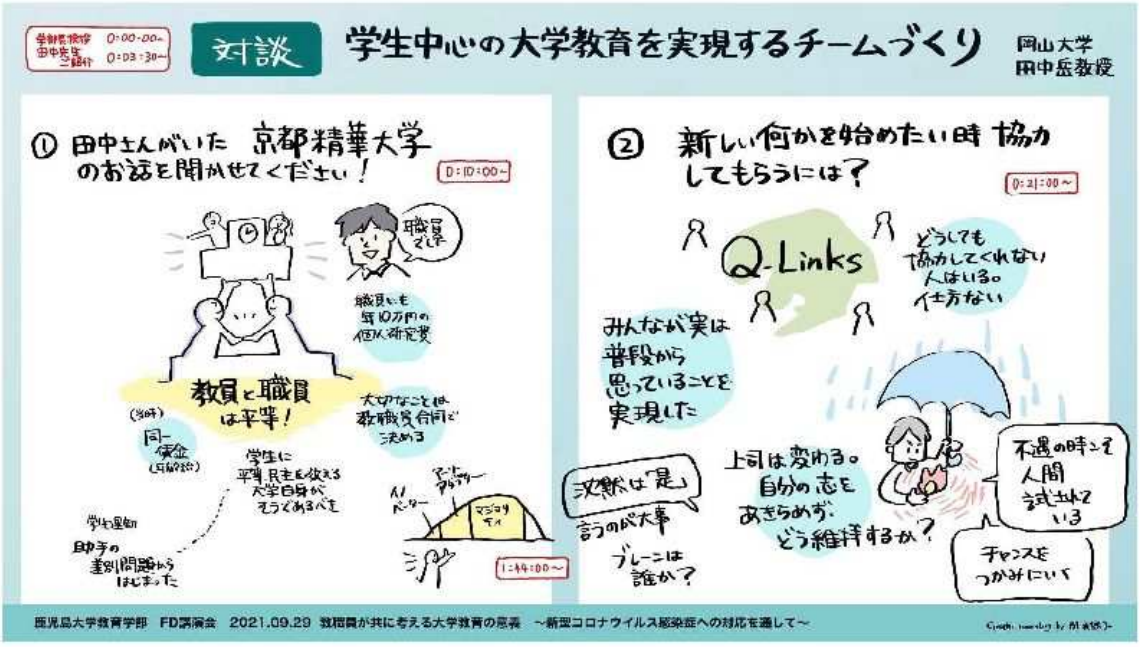
野村事務局長挨拶

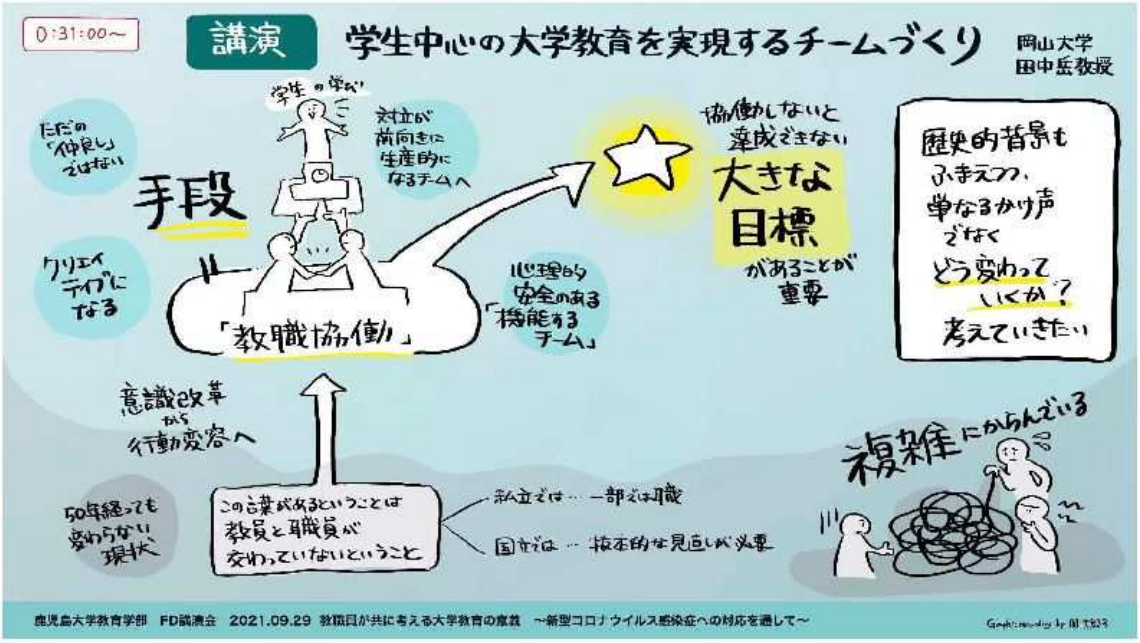
武隈教育担当理事挨拶

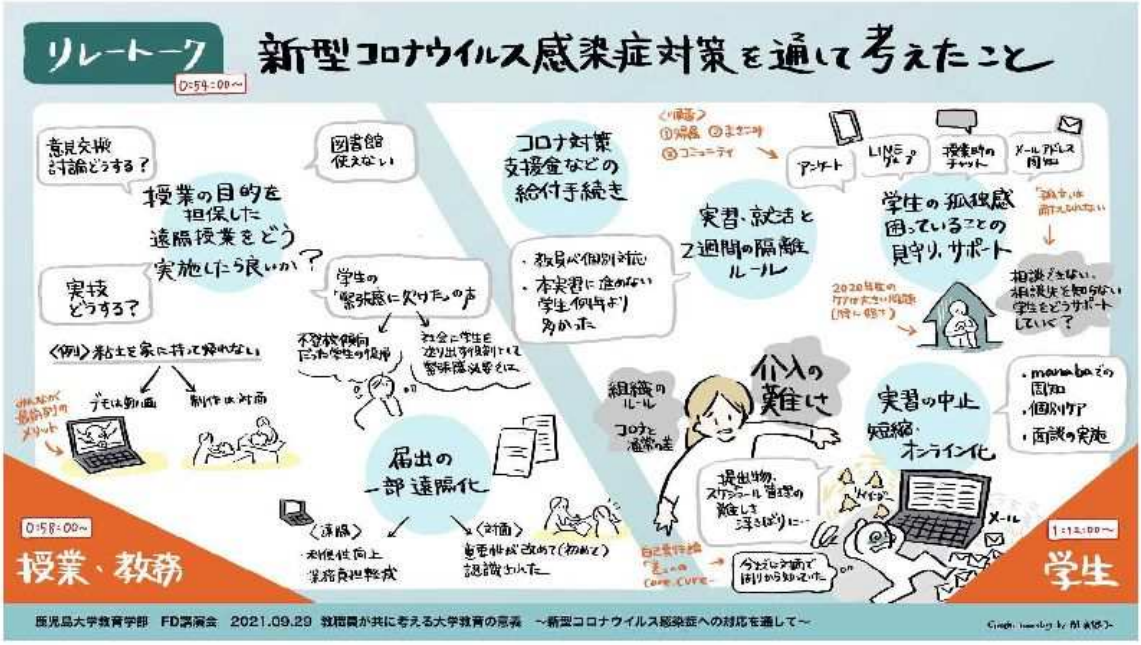
本年度の教育改善委員会講演会は，新型コロナウィルス感染症対策を１年半行ってきて，教員と事務職員との協働が重要であると再認識したことから，SD・FD の融合を目指し，「新しい形」の研修会を行った。「新しい形」の１点目は対談形式を取り入れ，あたかもラジオ番組を聞いているような方法での講演・研修会としたことである。また，リレートークを行うことで教員と事務職員との協働作業を講演会上で行ったことも画期的だといえる。実際準備段階で打ち合わせる中で情報共有や新たな知見を得ることができた。２点目はグラフィックレコーディングという手法を取り入れたことである。リアルタイムでトーク内容がイラスト化，文字化されていき，まとめが視覚的に入り，要点が整理されたことも新鮮であった。以下，本講演会のまとめに変えて関さんのグラフィックレコードを掲載する。

2.　講演概要

令和３年度FD講演会
「教職員が共に考える大学教育の意義」
鹿児島大学教育学部


対談
学生中心の大学教育を実現するチームづくり
岡山大学
田中岳教授
① 田中さんがいた 京都精華大学 のお話を聞かせてください！
0:10:00～
職員でも
職員にも 年10万円の個人研究費
教員と職員は平等！
(当時) 同一賃金 (正職員)
大切なことは教職員合同で決める
学生に平等、民主を教える大学自身がそうであるべき
学生運動 助手の差別問題からはじまった
アーティスト
アクター
メンバー
マジョリティ
1:44:00～
② 新しい何かを始めたい時 協力してもらうには？
0:21:00～
Q-Links
どうしても協力してくれない人はいる。仕方ない
みんなが実は普段から思っていることを実現した
沈黙は「是」
言うのが大事
ブレーンは誰か？
上司は変わる。自分の志をあきらめず、どう維持するか？
不遇の時こそ人間試されている
チャンスをつかみにいく
鹿児島大学教育学部　FD講演会　2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義　～新型コロナウイルス感染症への対応を通して～


0:31:00～
講演
学生中心の大学教育を実現するチームづくり
岡山大学
田中岳教授
学生の学び
ただの「仲良し」ではない
対立が前向きに生産的になるチームへ
手段
クリエイティブになる
「教職協働」
心理的安全のある「機能するチーム」
協働しないと達成できない
大きな目標があることが重要
歴史的背景もふまえつつ、単なるかけ声でなくどう変わっていくか？考えていきたい
意識改革から行動変容へ
50年経っても変わらない現状
この言葉があるということは教員と職員が交わっていないということ
私立では…一部では職
国立では…抜本的な見直しが必要
複雑にからんでいる
鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ～新型コロナウイルス感染症への対応を通して～


リレートーク
新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと
0:54:00～
意見交換討論どうする？
図書館使えない
授業の目的を担保した遠隔授業をどう実施したら良いか？
実技どうする？
学生の「緊張感に欠けた」の声
〈例〉粘土を家に持って帰れない
デモは動画
制作は対面
コロナ対策支援金などの給付手続き
・教員が個別対応
・本実習に企のない学生例年より多かった
実習、就活と2週間の隔離ルール
〈課題〉①孤立 ②まとまり ③コミュニティ
アンケート
LINEグループ
授業時のチャット
メールアドレス問題
学生の孤独感 困っていることの見守り、サポート
相談できない、相談先を知らない学生をどうサポートしていく？
介入の難さ
組織のルール
コロナと通常の差
実習の中止 短縮、オンライン化
・manabaでの周知
・個別ケア
・面談の実施
届出の一部遠隔化
〈遠隔〉
・利便性向上
・業務負担軽減
〈対面〉
重要性が改めて（初めて）認識された
提出物、スケジュール管理の難しさ浮き彫りに…
今オンライン授業で困りから知ったこと
メール
0:58:00～
授業、教務
1:12:00～
学生
鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ～新型コロナウイルス感染症への対応を通して～

リレートーク　新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと ―アンケート―

職員からの回答
1人も来ませんでした…

Q1. 新型コロナウィルスの流行で、働き方が良くなった点は何ですか？

- オンライン会議が広まり，遠隔地におられる方々とも会議，打合せをもちやすくなりました。
- 学会の会議がリモートなので、その場で資料を直して提示したりできて効率的。対面でやってたと思うとゾッとする。
- 自分が発言しなくてよいオンライン会議は、リラックスして出席できるようになったのがよかった。
- 会議等が対面とオンラインの区別で開催される。
- 業務の効率化が進んだと感じることがある（会議の時間短縮など）。
- テレワークが選択肢として位置づけられたこと。
- オンラインの活用方法を知ることができた。

Q2. 新型コロナウィルスの流行で、働き方が悪くなった点や困っていることは何ですか？

- 先生方や学生さんと，やはり対面でお話ししたり，ご相談したりしたいこともありますが，そうした場が不足しているように思っています。
- まだ困ってなくて、困ったら困るので、進行中。
  コロナで大学閉鎖になっても自宅で仕事できるように、現在、家用のpcを研究室のと同様の作業ができるようにアプリ入れたりしている。とても大変。1ヶ月はかかりそう。
- 両面を直視する時間が長すぎる日が多くなった。視力が落ちてきている。
- 教員の事務的仕事が増え、研究が後回しになったことがある。
- 案件以外のコミュニケーションが取りにくいこと。
- 世の中の状況によって日程や方法など急に変更になることが多く、何度も授業等予定を組みなおさなければならない点。
- 人と人とが顔を合わせて話すことが少なくなること で雑談や笑顔も減り、人との間に壁を感じるようになったこと。
- 教員同士顔を合わせることが全くなくなったため、情報共有や相談などがし難くなった。

1:31:00～
協働

リレートーク　新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと ―アンケート―

Q3. 新型コロナウィルスの流行以前から、教育学部において改善すべきと感じてこられたことはありますか？

- 個人的には、改善すべきと強く感じるまでの事項はございません。
- 教員の働き方ではないが、学生の時給が安すぎる。良い学生が民間の時給の良いバイトに流れて、大学のバイトに集まらない。
  1000円くらいにしてほしい。
- 会議時間が長すぎる。案の提案がなく、一からみんなで話し合うことが多かった。
- 教員・職員の原用の実態を共有し、課題を共に改善していく必要があると思います。
- 流行の前後、ということで特に浮かぶことはありません。
- これは教員がするべきなのだろうかと感じる仕事が多くなってきていること。
- 細かい事務的仕事や実習の引率等が増え、研究に充てる時間が年々減ってきているように感じる。また、学生に対して過保護になってきていると感じる。

1:31:00～
協働

田中先生コメント　1:41:00～　関さんプラス補作　1:49:00～
野村事務局長挨拶　2:00:00～　武藤教育担当理事挨拶　2:03:00～

Q4. 今回のFD講演会は教員と職員の「協働」をテーマにしています。それぞれに聞いてみたいことや質問はありますか？

- 事務の皆様には，いつも丁寧にご助言いただき，とてもありがたく思っている次第です。事務の方々の視点から，日頃の業務について，細かいことでもかまいませんので，教員に改善してもらいたいと感じておられることをうかがうことができれば，と思った次第です。
- 教員に言われるか，されて嬉しかったことを知りたい。
- オンラインで模擬授業を実施されている先生方の具体的な取り組み例。
- 教育・研究機関ならではの良さ（または難しさ）を感じることはありますか？
- 対面でのコミュニケーションができればそれが一番だと思いますが、対面が難しい場合にさらなる「協働」のためにどのような形・方法が考えられるかについてご意見をお聞きできたらと思います。
- 教員も職員もそれぞれがプロフェッショナルであるべきだと思うのですが、職員の方が教員に求めていることが少し分からないので聞いてみたいです。また、拘束時間が決まっていない教員に時間の使い方が職員の方と少し違っていると思うのですが、質問などで電話や窓口に来てほしくない時間帯を教えていただきたいです。

3. 参加者からの感想（一部抜粋）

✧ ドラレコは，表現されたものを見ることで，頭に入ってきたことが再確認できたこともよかったです。「敵とのコラボレーション」という本の紹介を頂き，まずは読んでみようと思いました。（教育学部）

✧ 教員として，事務系の方々に迷惑をかけないことから協働は生まれるような気がします。これからも教員として迷惑をかけないようにします。国の方では新総裁も決まりましが，トップが何をしたいのかビジョンをしっかり示したうえで，教員と職員が協働で，ブレーンとしてそれを具現化する積極的な提言や組織を主体的に作ってビジョンを具現化していく体制づくりが求められていますね。（教育学部）

✧ みんな仕事を改善したいとは思っているけど，言うと「あなたやって！」となるから黙りますよね。身近に，言ってしまうがために命をすり減らして仕事している人を知っているので，あぁはなりたくないといつも思っています。（教育学部）

✧ 良かった点として，対談形式を視聴するので，気楽に参加でき，聞きやすかったです。また，グラフィックレコーディングは見てるだけで楽しかったです。事務の方の話が聞けたのでよかったです。改善点として，事務の方々の緊張感がもう少し下がるといいと思いました。そして，教職ともに学生の学習環境を支援している，大学の研究力を維持しているという共通認識を深めたいと思いました。（教育学部）

✧ グラフィックレコーディングが実に見事でした。聞き取り調査でメモを取るのが，あんな適確に記載できれば素晴らしいです。どういったトレーニングを積まれると，あのような芸当を習得できるのでしょうか？機会があれば，ご教示いただきたいと思いました。（教育学部）

✧ Zoom ながら職員が登壇する初の試みは“新鮮”で，「教職員の協働」のきっかけになること間違いないと感じました。グラフィック・レコーディングに接したのも初めてで，こちらも配信の際に確認したいと思っています。（附属学校事務）

✧ 教職協働がうまくいかない原因について，昔は，権力的な部分が大きかったように感じますが，今は，教員も職員も業務量が増え，心身の余裕がなくなっていることも要因ではないかと考えています。私はありがたいことに，現在，教職協働できている感覚があります。こういった，人を大事にしてくれる方々と頑張っていきたい，とやりがいにつながっています。（教育学系事務）

✧ FD 活動紹介チラシのデザインがとてもよかったと思います。 岡山大の先生が事務官から大学教員になったキャリアの持ち主でこうした FD・SD 活動に積極的に取り組まれておられた方でしたので，お話に説得力がありました。学部の先生方も誠実取り組み状況をお話いただき，参考になりました。教職大学院でも FD 活動を毎月 1 回実施しており，その中で授業リフレクションを行うようにしています。（教職大学院）

✧ 前任地の私立大から課題に着任して 3 年が経過しましたが，事務職員との協働の機会が少なくなったと思っていました。事務職員の方々の雰囲気が異なるようにも感じていますが，その背景には国立大学での事務職員の採用や異動形態があるとのご指摘にはっとしました。協働は目的でなく手段というのは，そのとおりだと思いますので，協働を手段として機能させるような取り組みが必要かと思います。例えば，異動までの標準的な期間をもっと長くする，といったことはすぐにでもできないのでしょうか？（水産学部）

- ✧ 教員も事務職員も目指すところは同じであるはずなのでそれぞれの専門性を生かしながら「共に考える」ことが非常に重要。お互いの仕事・役割を理解しつつ　オープンに意見交換する機会を持つ。組織は「仲良しこよし」ではだめということは聞いたことがあったがなぜダメなのかということがただただ波風を立てないだけでなく（生産的な対立があってこそ組織が成長するという話が印象に残った。（医歯学域医学系）
- ✧ 職員と教員が腹を割って言いあえる関係を築ければ本当に大学にとっても学生によっても素晴らしいことと思います。グラフィック・レコー ディングは，初めて実際に見ました。その場で理解もしやすいし，振り返りでしっかりと理解を深めることができました。通常の授業等でも，取り入れることが出来たら，素晴らしいと思います。（理学系事務）
- ✧ 今日のFSD会に参加して良かったと思っていますが，同時に絶望感も感じております。私はまだ4年しか勤務していないが非常に息苦しく閉塞感を感じています。そしてこの大学の改善・改革を諦める日も遠くないと思います。今日は1時間ぐらいは希望を味わった会議でした。（共通教育センター）
- ✧ 事務職員の私にとって，教職協働は常に重要なポイントであり，難しい問題でもあります。教員と職員の間に見えない垣根があることも事実ですが，日々の仕事の中で，先生方と同じ問題を共有したり，一緒に何かを作り上げることができたときは，非常に充実感があります。コロナ禍の状況で，所属している工学部でも教員と職員が協力して，（最終目的としては）学生のために動くことができた，と，今日は，改めて振り返る機会にもなりました。自由にフラットに発言できる職場をいつも意識していければと思います。（工学系事務）
- ✧ まず，最初の教員と職員の「格差」の問題が残っていることに驚きました。現在，私は，管理職として動いていますので，職員とは密に連携を図っています。ですから，そのような問題があるとは思っていませんでした。私達は「技術者」になるための教育をしていますので，教育学部の先生方の教育論は，私にとっては新鮮でした。（医学部保健学科）
- ✧ FD講演会というと少し堅苦しいので，もっと気軽に「職員」と「学生」がホンネでトークできるような企画（教員は脇役で）が定期的にあるとおもしろいかもしれないと思いました。（農学部）

５章　教育改善セミナー

趣旨：教育学部では、附属学校園との共同研究を行っている。多くの教員が関わるこれらの研究の蓄積をどのように授業に活かし、学生に還元できるのか、本セミナーでは、FD 活動として初めてこの点にスポットを当てた。ラウンドテーブルでは、附属学校園と学部教員のペアによって４つの共同研究が報告された。

また、本年度の教育学部ベストティーチャー賞の授賞式を実施し、鹿児島大学ベストティーチャー賞受賞者の中島友樹先生による講演を行った。中島先生は附属学校との共同研究や自身の教職経験を活かした授業に取り組まれたことで、選考過程において高い評価を受けている。

概要：

日時：2 月 22 日（火）13:30-15:30

場所：オンライン開催

第Ⅰ部　ラウンドテーブル：学部と附属学校園による共同研究の取り組み

附属小学校の共同研究

国語部の研究　国語部教員、原田義則（共同研究者）

理科部の研究　理科部教員、土田理（共同研究者）

附属中学校の共同研究

体育部の研究　体育部教員、中島友樹（共同研究者）

附属特別支援学校

小学部の研究　初村多津子（小学部主事）、片岡美華（共同研究者）

第Ⅱ部　教育学部ベストティーチャー受賞式・講演会

教育学部保健体育科　中島友樹先生

講演「教員養成において教育実践の知見を活かす」

内容：

第Ⅰ部では、４つの報告が行われた。

まず、附属小学校国語部の共同研究の報告では、「点から破線の取り組みへ」というコンセプトが示された。今回の報告の背景には、従来型の教育実践を「段階的に経験する学びへと転換を図る」ことが中教審で提案されたこと、また教職課程コアカリキュラムにおいても子どもの実態を視野にいれた「授業設計」の重要性の理解が重視されてきたことなどがあり、にもかかわらずコロナ対応によって教育実習と授業との関連が持ちづらい状況が昨年度より続いていることなどから、今回、大学の授業と附属小学校の授業をつなぐ新たな共同研究が構想された。子どもの姿がみえる「本物の授業づくり」をどのように学生に体験させればいいか―そこで、４月当初から附属小教員と共同研究者の継続的な交流を行い、６月の公開研究会に向けた授業づくりのプロセスを大学の後期授業で取り上げるという計画が立てられた。実際に、子どもの事実（ノートや授業中の姿）を双方が共有することで、当初の指導案作成の段階からみると、発問が変化し、その結果としての子どもの学びの深まりがみられたとされた。

初等教育コース必修科目「国語科教育Ⅰ」（２年生以上）では、文学の授業が子どもの実態に応じてどのように変わるかを学生に経験させる試みが先の共同研究の成果を取り入れて行われた。具体的には、「読み」の発達を目的とした授業において、通常小学３年生では困難と思われている「作品世界全局を結合させ読みすすめる」ことが、この学級の実態としては可能であろうということが附属小教員と共同研究者の間で了解されたこ

とで、指導案の修正と発問の変更が行われ、公開研究会の授業ではねらい通りの子どもの姿が見られたことが学生に示された。

特に興味深かったのは、実際に附属小教員と共同研究者の「対談」形式で学生に示された点である。学生は「教えるという行為の面白さ」を実感として掴んだようであるが、おそらく子どもの変化を知るだけでなく、授業づくりのプロセスを目の当たりにしたことのインパクトが教職への動機づけに繋がっているのではないかと思われる（写真参照）。報告では、隣接地のメリットを活かした「教材研究の時間」の継続的な確保、さらに連携をシステム化することの可能性として具体的に金曜日の 15:50〜18:00 という時間帯についても示された。一週間のなかで金曜日の夕方に Zoom をつなぐというまさに「破線」的な関わりの提案であった。

続いて、附属小学校理科部の共同研究の報告が行われた。ここでは、学部の養成段階で重要となる力量形成とは何かを焦点化し、その上で共同研究としてどのような連携を行うのかが明確化されることの必要性が提起された。具体的には、学部在学中にできることは「授業がみえる」ための能力形成であり、授業を観る個所が分かることであるという提案であったが、これは共同研究者が 20 年以上に渡って理科部と関わりながら蓄積されてきた経験から導かれたものであった。

「初等理科授業研究」では、まずはモデル授業のビデオ視聴から始まり、学生らの「みる」の土壌を耕すという。続いて、研究公開前の授業参観と５月の授業公開、そして６月から７月にかけて継続的な授業参観が行われている。学生は、毎回まとめを作成するが、そこでの授業を観る観点の変化があるという。学生の中にみられる変化は、授業参観を始めて５〜８時間目あたりでみられるという点が興味深い。

授業の最後には、模擬授業と報告会が行われるが、国語部と同様に、附属小理科部の教員が指導助言に入っている。実は、附属小側の教員の中にかつての本授業の受講者が複数いるということもあって、学生が毎週訪問することや共同研究に学生が参加することについての理解と体制が整っているといえる。授業者と共同研究者、学生の相互に「授業をみることの価値」が共有されているからこそ、最後の報告会が土曜日の午後から夜までという十分な時間を確保しての実施が可能になっていると思われた。

三つ目は、附属中学校体育部の報告がなされた。この報告では、まずは体育科授業で従来難しいといわれていた「はね跳び」の取り組みが紹介されたが、体育科そのものの面白さに引き込まれる内容であった。「技ができるようになる」ということの背景には、生徒個人のそれぞれの課題を把握することや、教師が的確な補助の立ち位置を占めること、意図的に遠くの生徒に声をかけることを通して広い体育館が統一感のある空気で満たされるような工夫がされているということであり、それらのひとつひとつが研究の蓄積に裏付けられているのである。また、附属中の授業者からは、はね跳びで怖さやけがへの不安から思い切り取り組めないという現状を乗り越えるために、共同研究者と共に取り組んだことで子どもの劇的な変化がみられたということが紹介された。また、学校目標である「主体的に学習に取り組む態度」の育成にとって、このはね跳びの授業が重要な場を提供することになったということである。

共同研究者からは、大学での剣道の授業も紹介された。礼儀作法や型の獲得ばかりで部活のような授業を受けてきたという学生に対して、剣道のもつ勝負の面白さを経験させ、むしろ「負けから学ぶ」ということも実感させていったという。学生は、できる人だけが活躍するのではなく、剣道の本質を踏まえた授業の魅力を体験したようである。

これらの附属学校の授業と大学の授業は、「今」の授業改善と「将来」

の授業改善という筋で繋がっている―つまり体育科の授業研究という大きな枠組みの中で積極的なつながりをもっているのであり、教育学特有の授業改善の視点が示された。

最後は、附属特別支援学校小学部の報告であった。障害児教育学科の教員３名が、特支学校の小・中・高等部に関わりながら公開研究をはじめとした共同研究に組織的に取り組んでいるという。先の３つの報告が提案している組織的な附属学校園との共同研究が、ここでは開校当初から実施されているということで、その研究の継続性と多面性から多くの示唆を得ることができた。

とりわけ興味深いのは、子どもの「実態」をどのように掴むかという教育実践の中核に位置づく問題を軸として共同研究が組み立てられている点である。共同研究者が「新版Ｋ式発達検査」の導入を提案して以来、これまで10年以上に渡って全児童生徒のデータが集約されており、小学部から高等部までの成長・変化を捉える基礎資料となっている。このような校内における子どもの実態把握の方法は、教員の人事異動に伴う研修でも工夫がなされており、本年度は共同研究者が行った検査の様子をVTRに撮り、それを観ることによってラポートの取り方、検査道具の準備の流れ、検査の順番の目安、検査中の視点も含めて、教員が常に確認することができるようにしたということであった。また、データを取ることだけでなく、検査結果を踏まえてどのような教育を行うかについても夏の研修で具体的に深めているという。日常の実践と深く関わった研修が実施されている。

さらに、新版Ｋ式発達検査の導入は、発達検査としての役割だけでなく、特支学校の各学部をつなぐツールとして位置付いているという。共同研究者からは、０歳から成人まで用いることができるこの検査を用いることで、小学部から高等部までをつなぐ「共通言語」としての有効性を活かしているということも指摘された。この研究は、論文や書籍としても公表されている。

②－１　共同執筆書籍刊行（2013.2　ジアース教育新社）

「特別支援教育の学習指導案と授業研究」

子どもたちが学ぶ楽しさを味わえる授業づくり

特別支援教育の授業づくりのすべての過程が分かるように，授業づくりの考え方，設計，実施，評価，改善する方法までを具体的に記述しています。各教科等や領域・教科を合わせた指導ごとに学習指導案の具体的な書き方を例示し，そのポイントも記載しています。また，授業を振り返り，次の授業に向けて改善するための授業研究の考え方やその具体的方法についても紹介しています。教職を目指す学生，特別支援学校，特別支援学級等の教員に向けた，学習指導案策作成や授業研究・授業実践に役立つ参考書です。

鹿児島大学教育学部 肥後 祥治／雲井 未歌／片岡 美華

鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 編著

②－２　共同執筆書籍刊行（2020.2　ジアース教育新者）

「子どもの学びからはじめる特別支援教育のカリキュラム・マネジメント」

児童生徒の資質・能力を育む授業づくり

「カリキュラム・マネジメントって何？」
「これまでの教育課程の構成とどう違うの？」
「具体的にどうすればいいの？」

そんな悩みをかかえる先生のために，学習指導要領改訂のポイントとなっている「育成を目指す資質・能力の三つの柱」，「カリキュラム・マネジメント」などについてやさしく解説しています。また，「新学習指導要領の理念を踏まえた指導計画って，どう考えるの？」「資質・能力を育む授業ってどんな授業？」などの悩みへのヒントとなる９つの授業実践を取り上げ，どのように授業を計画，実施し，児童生徒の学びの姿から日々の授業や教育課程の評価，改善につなげていけるかを具体的に紹介しています。

鹿児島大学教育学部　肥後 祥治／雲井 未歌／廣瀬 真琴

鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 編著

ジアース教育新社より　定価1900円(税抜)

第Ⅱ部では、令和２年度鹿児島大学ベストティーチャー賞を受賞された中島友樹先生の学部における表彰式と講演会を行った。中島先生の担当科目「体育科教育」の授業は、昨年度遠隔授業として実施されたが、スライドや動画資料が工夫され、随時学生が閲覧することができるようmanaba等で整えられただけでなく、学校での実践場面をふんだんに取り入れることで体育科教員への動機づけを高めるものであったという。学生からは、「体育科への深い理解に加え、広い意味で活用できる学習になった」「自分の中で一番ためになり、今後に活かすことのできる授業内容だった」「体育科以外にも通ずる教育観を学ぶことができた」などの声が寄せられている。

表彰式の様子（於教育学部）

教育学部では、

とりわけ実技系科目やアクティブラーニングをどのように遠隔授業で実現するかが課題となっているが、その意味で「体育科教育」では示唆に富む授業が実践されており、全学でも高く評価されている。

さて、講演「教員養成において教育実践の知見を活かす」では、「理論と実践の架け橋」となるための取り組みとして、３つの内容が紹介された。バレーボールの教材化、オンラインでの表現活動、卒論研究である。

今回紹介された「小学校体育D」では、「バレーボールの特有の楽しさとは？」という問いをもとに授業が展開されている。紹介された内容は次の通りである。まず、受講生のゲームを動画に撮り、データとして可視化して、ほとんどラリーが続いていないことを認識させる。次に、学生らよりもはるかに長くラリーが続いている中学校体育の動画を視聴させる。すると、見た目にはよりバレーボールの楽しさが増しているように見えるが、実は触球回数が多い生徒と少ない生徒の差が激しいことに気づくようになる。そこで、ラリーが続けばいいというわけではないことを踏まえさせたうえで、次に「ボレー」(的当てゲーム) というこのスポーツの本質的な要素に着目させ、アタックが頻出しボレーが楽しめることに焦点化した授業づくりへと誘っていくのである。このように、「バレーボールの本質的な楽しさに触れるゲーム」ための教材化は、「ゲームを診る」視点の深化とともに深められていく点が示された。

続いて、Zoomを活用した表現活動として「表現リズム遊び：おいしいごはんをつくろう！」が紹介された。学生もまだ遠隔授業にさほど慣れていない昨年度の授業である。35秒の動画づくりであるが、BGMに併せて料理の動作を録画するという取り組みで、学生自身にとって新鮮な体験であったと同時に、体育科授業のイメージが広がったようである。表現活動は、ある意味で教育を構成するすべての領域にまたがるものであり、この授業で行われた表現の「オンライン共有」への取り組みは体育科教育に止まらない提案であった。

最後に、卒論研究について紹介された。生涯スポーツをテーマとしてまとめられた卒論研究は、附属学校での調査、研究と執筆（運動有能感（上・中・下位群）に対応する効果的な教師行動)、学校へのフィードバックというプロセスのなかで行われている。中島先生が冒頭で述べられた「理論と実践の架け橋」に学生も参加し、体育科授業の科学的根拠と実践的展開の面白さが実感されたのではないだろうか。

附属学校園は「お隣さん」―この中島先生の提起は、第Ⅰ部の各報告でも出された点であり、今回のセミナーの成果を象徴しているといえる。また、その両者をつなぐ接点は「授業を見る・観る・診る」ということに集約されるということも、全体を通じて感じたことであった。

なお、当日の参加者は、教育学部教員29人、教育学部事務部4人、附属学校園13人、他学部1人であった。

１章　令和３年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査

１．はじめに

教育学研究科教育実践総合専攻（以下、本専攻と略記）では、例年後期の 12 月に教育改善に係る学生アンケートを実施してきた。今年度も、昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況の中で、学生の学修・研究上あるいは生活上の困難等、早急に対応が求められる事態の把握に努めるべく、前期の７月から９月にかけて実施した。なお、今年度は本専攻の最終年度でもあり、なお一層の早急な対応が求められた。

２．調査の実施方法

令和３年度の調査方法は以下の通りである。

・実施時期　2021 年７月 20 日（火）～９月 10 日（金）まで
・対象者　　本専攻在籍学生
・調査手段　Google フォームを用いた web 方式（匿名）
・周知方法　担当係である総務係を介し教務係より一斉メールを送信
・質問項目　前年度の質問項目を一部整理統合し、次に示す６項目について「満足している点」と「改善してほしい点」を回答依頼
　(1)教育学研究科教育実践総合専攻の授業について
　(2)研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について
　(3)研究成果の口頭発表（修士論文発表会を除く）に係る指導や支援について
　(4)研究成果に関する論文執筆（修士論文を除く）に係る指導や支援について
　(5)研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援について
　(6)その他、大学院での学修や生活全般について意見や要望

３．結果及び教育改善委員会の分析や対応

本専攻最終年度の今年度の回答者数は、例年に比べて大幅に減少し、昨年度の半数の６名であった。以下、質問項目ごとに回答を示し、本委員会としての分析や対応を附記する。なお、記述回答の本文は、基本的に回答者入力のままとする。

（1）教育学研究科教育実践総合専攻の授業について

【満足している点】

・ゼミに満足しています。先生が丁寧に対応してくださるからです。
・ほとんどの授業がグループワークなどがあり、皆と協働できているところ
・先生方や受講生と話をしながら考えを広げたり、深めたりできるところに満足しています。
・様々な分野の人たちとこうしたやり取りができるのは、大学院だからこそなのかなと思っています。
・どの授業も深い学びを提供してくれる点です。

【改善して欲しい点】

・授業登録がしにくい点に改善の余地があると思います。システムがわかりにくく、扱いにくいからです。鹿児島大学出身者の方に毎回お尋ねしています。

・授業の人数が少ない場合は、学生の研究課題によって授業を進んだほうがいいかもしれないね。
・シラバスの内容と違うときがある。学生の実態に合わせて変えるのはありがたいが、内容が違うと後期の履修登録に迷ってしまう。
・他の大学院のことを知らないので、”大学院ってこういうものだ”と思えば特に改善してほしいことは思いあたりません。
・最終課題の提出日が重なることが、かなり負担です。１週間前とかではなく、事前に課題の内容と提出日を知らせてくれるとありがたいです。

（２）研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について

【満足している点】
・図書館で貸借などすぐ対応していただけるので助かっています。
・満足している点については、指導先生の責任感が強いということです。理由とは、先生はどんなに忙しくても、真剣に論文の指導をしてくれます。
・ipad の貸し出しはありがたいです。また、ipad に入っていないソフトも、必要であれば対応していただけたのは嬉しかったです。
・学校内で自分の居場所を探す手間が省けるので、院生研究室があるのはありがたいです。また、学内の Wi-Fi は不安定なので、院生研究室内に Wi-Fi があるのもとてもありがたいです。
・研究室で机が割り振られ，自由に使える点がよいです。

【改善して欲しい点】
・文系棟まで wifi が飛んでいてくれたらもっと便利だろうと思います。wifi 環境が整備されることは遠隔授業やメールやりとりなど学習と直結していると思います。
・院生室の環境を改善してほしいです。理由は、院生の人数が少ないので、消毒剤がないです。他のは、院生室の椅子が壊れています。修理したり、変えたりしていただけませんか。
・集まることのできる教室の少なさ。（コロナ禍の中仕方のないことですが。）
・ストレートで入学してきた方々には必要ないかもしれませんが、ブランクがある人に対して改めて研究の進め方や修士論文の位置づけのようなものについて話していただける時間（講義）があるとうれしいなと思います。また、院生研究室の年度初めのリセットが難しいので、そこをどうしていけるかを一緒に考えていただけるとうれしいです。（例．コピー機はあるが接続方法がわからない、ロッカーはあるが鍵がなかったり誰のものかわからないものが残っている、机上や引き出しに残っているもの問題など）
・PLC に Wi-Fi ルーターを設置してほしいです。

（３）研究成果の口頭発表（修士論文発表会を除く）に係る指導や支援について

【満足している点】
・指導先生のおかげで、毎週研究課題に関する文献を読み、レジュメを作成し、毎週ゼミの時に先生に説明させていただきました。このような方法では、私は完全に文献の中に入ることができますし、レジュメを書くことによって情報を抽出する能力を鍛えることもできます。このような方法が大好きです。
・まだ、具体的には取り組んでいません。

【改善して欲しい点】
・今まで、ないです。
・まだ、具体的には取り組んでいません。

（4）研究成果に関する論文執筆（修士論文を除く）に係る指導や支援について
【満足している点】
・迅速丁寧にご指導いただき大変感謝しています。
・私は外国人ですから、論文を書く時、書き言葉の意味がよく分かりません。私の指導先生は間違った文法を直してくれる時間がたくさんかかります。このような方法は助けになりました。
・特になし
・忙しい中、何度も添削していただけてありがたいです。
・まだ、具体的には取り組んでいません。
【改善して欲しい点】
・今まで、ないです。
・特になし
・自分自身の問題ばかりなので、特にありません。
・まだ、具体的には取り組んでいません。

（5）研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援について
【満足している点】
・特になし
・行う予定はありません。
【改善して欲しい点】
・指導先生は私が論文を発表する考えを知ってから、専門的なサポートと指導を提供してくれました。
・特になし
・行う予定はありません

（6）その他、大学院での学修や生活全般について意見や要望
・M2 の学生としても、もうすぐ卒業します。でも、やはり私の提案を言いたいです。いくつかの課程の登録学生が少ないなら、先生は学生の要求によって授業を手配してもいいと思います。多くの授業は学生の論文を書くための知識ではなく、課題と関係なく教育学と関係のない知識です。以上は自分の要望です。
・特になし
・コロナによって同学年の人たちとつながりの薄い時間を過ごしてきたので、修士論文の提出と口頭試問等が終わった後で尚且つ卒業前に、１度でいいので参加自由のお疲れ様会のようなものができたらうれしいなと思います（コロナの都合もあるのでできるかどうかはわかりませんが)。年度末は先生方も事務の方々も忙しいのは承知していますが、みんなとやり取りができる手段を一緒に考えていただけたらうれしいです。

総括〔全体のまとめ〕

【満足している点】

・ゼミ担当の教員が丁寧に対応してくださる点。
・グループワークを通して皆と協働できる。
・教員や院生との対話を通して考えを広げたり、深めたりできる点。
・どの授業においても深い学びを提供してくれる点。
・タブレットの貸し出しがありがたかった。
・論文発表に対して、専門的なサポートと指導を提供してくれた。

【改善して欲しい点】

・Wi-Fi 環境の整備（院生研究室、文系棟、PLC 他）
・院生研究室の環境改善（椅子の修理、消毒液の設置、年度初めのリセット 等）
・システムがわかりにくく、履修登録がしにくい点。
・授業内容がシラバスと異なるものがある。

４．おわりに

アンケート回答率の向上が例年の課題でありながら、今年度が本専攻の最終年度であることから、昨年度より回答率が低下したことは反省すべき点である。

本章冒頭に述べた通り、今年度は昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況の中での実施となった。結果的に回答率は低下したものの、回答内容については、今後の教育学研究科における学修環境等の充実に向けて、大きな示唆を与えるものとなった。

編集後記

本年度の教育改善委員会では、授業アンケートの分析過程をシステム化したことで、作業を外部に依頼せずとも委員レベルで行うことができました。この作業は、全体集計だけでなく、科目毎に結果をまとめて学生への閲覧を可能とする個別の集計も含んでおり、従来は多くの時間を要していました。このシステム化は、委員会活動を支える上で大きな一歩だったと思います。改めて、担当していただいた須磨先生に感謝申し上げます。

今後の課題として、第４期中期目標・中期計画において教育改善をカリキュラムマネージメントにつなげることが求められる中で、教務委員会など他の委員会とどのように連携していくかが挙げられます。また、教育学研究科が学校教育実践高度化専攻に一本化されたことを活かして、どのように教育学部らしい授業改善を行っていくかということも課題です。特に、ベストティーチャー賞の選考については、選考基準などについての検討が必要です。大きな挑戦が続くものの、「授業づくり」を軸とした教育学部らしい教育改善活動が行われることになると思います。（前田）

今年度は授業アンケートの実施と結果の集計・分析を担当しました。集計作業を行うなかで、様々な授業に対する学生たちの率直な声に触れる機会を得たことは非常によい経験となりました。令和３年度前半はコロナもやや落ち着き、多くの授業が対面に戻りつつありましたが、後期後半は新型コロナ再拡大の影響で多くの授業が再度遠隔に変更せざるを得ませんでした。遠隔授業では学生の反応が見えにくく、授業アンケート、とりわけ自由記述欄に寄せられたコメントなどは重要性を増しているように思います。私の担当する授業でも参考となる意見が多数寄せられており、来年度以降の授業に積極的に活用したいと思っています。一方で、教育学部には多様なバックグラウンドを持つ学生がおり、授業に対する要望も千差万別です。コロナ禍での限られたリソースのなかで、こうした要望にどう答えていくべきか、どこまで答えられるか悩ましい問題だと思います。（須磨）

今年度，教育改善委員会に参加させていただき、大変多くのことを学ばせて頂きました。特に、担当させていただきました「授業紹介」では、ご多忙の中にも関わらず、多くの先生方から有益な情報を多数お寄せいただきました。本当にありがとうございました。

また、個人的には今年度初めて開催されました「教育改善セミナー」に参加させていただき、附属学校園との連携を図りつつ学部授業改善へとつなげるという、新しい視点を得ることもできました。

今後も、with コロナの状況が続くものと思われますが、どのような授業方法が効果的なのか、先生方と一緒に考察・構築していければ幸いです。引き続き、本委員会への御協力をよろしくお願い申し上げます。（原田）

今年度から教育改善委員として学生 FD 委員会を担当させていただきました。新型コロナウィルスの影響で新しい授業形態となり２年目の今年度は、Zoom 授業とオンデマンド授業、そして対面授業を組み合わせることにようやく慣れてきた反面、対面でしか得られないことを遠隔にしなければならない歯がゆさとの闘いでもありました。その中で開催した学生 FD 委員会主催のシンポジウムでは、学生から現状への不満等が多く寄せられ、教員側では見えない部分が沢山あることに驚きました。特に、遠隔授業におけるアクティブラーニングの難しさが目立っています。ブレイクアウトルームでのディスカッションが円滑に行えていないことはもちろん、画面を通すことで一方通行になりやすいことを教員側にも気づいてほしいという学生の思いが、シンポジウムのなかで強く感じられました。新しい授業スタイルに慣れてきたいま、教職員と学生双方がより良い環境になるよう、教育改善委員会の活動が更に必要となってくるのではないかと感じています。（清水）

FD 委員 2 年目となりまたコロナ対策も 2 年目となりました。遠隔授業には慣れたものの、その質が問われるようになってきており、他大学の教員を含めて情報交換するなかで、授業に合ったより良い方法を模索しています。昨年度の編集後記にも書いたオンライン学習に向き不向きの学生さんの存在については、他大学でも同様の課題が表面化してきており、学会でも議論する機会がありました。今後さらに ICT 教育が活用されていくと思いますが、その効果を検証したり多様なニーズに応じたやり方を検討したりするなど FD 活動とも結びつけて研鑽できればと思っています。本年度は FD 講演会と FD セミナーの両会で話者を務めさせていただきました。普段ゆっくり話せていない事務職員の方と話せたり、これまでの活動の振り返りができたり、いい機会となりました。グラフィックレコードという新しい方法も知ることができ、感謝しています。（片岡）

今年度、大学院教育学研究科教育実践総合専攻の授業アンケートを担当しました。昨年度から続いている新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況の中で、大学院生の学修・研究上あるいは生活上の困難等の実態把握とその対応に努めるため、例年通り実施しました。今年度は教育実践総合専攻の最終年度でもあり、なお一層の早急な対応が求められたにもかかわらず、昨年度より回答率が低下したことは誠に残念で、反省すべき点だと感じています。しかしながら、回答内容については、今後は学校教育実践高度化専攻の一専攻となる教育学研究科における学修環境等の充実に向けて、大きな示唆を与えるものになったと思います。（小江）